二〇二〇年一一月六日

天高し大学病院棟並べ　菜々
黄落を賞でつ拾いつ吟行す　たか子
飛ぶ星に願ふ間もなき島泊り　もとこ
蜘蛛の囲に吊られ陽に透く紅葉かな　智恵子
崩落の傷癒へぬまま山粧ふ　凡士
観音の御手に身罷る冬の蝶　素秀
露天の湯一人占めして秋うらら　やよい
潮入りの波に揺られて浮寝鳥　智恵子

二〇二〇年一一月五日

上り根の大樹に添ひし冬すみれ　たか子
福耳の人頭石や冬ぬくし　明日香
江田島の古りし学舎島紅葉　凡士

二〇二〇年一一月四日

秋惜しむ蛇行の大河見下ろして　やよい
苅田風鎮守の杜を吹き抜ける　はく子
朝の陽を享けて震へる冬すみれ　みきお
塵取りに色を重ねて柿落葉　豊実

二〇二〇年一一月三日

読みたい本読める幸せ文化の日　菜々
秋晴や今日より新しき句帳　菜々
聖堂へ小径散り敷く銀杏かな　凡士
大銀杏千木より高く黄落す　ぽんこ
補聴器に馴染める父や文化の日　なつき
コロナ禍のお洒落マスクや文化の日　満天

二〇二〇年一一月二日

もみづれる桜並木の池塘かな　せいじ
混み合へる路線図思ふ枯木立　明日香
茶の花やいにしえ偲ぶ館跡　む　べ
跳ね出しは踏まれてしまふ鰯漁　潤道
秋寂ぶや竹の葉擦れの音もまた　菜々
園児らの返事高らか小鳥来る　たか子
弁財天固く扉を鎖し神の留守　ぽんこ

二〇二〇年一一月一日

小春日に広ぐ骨董蚤の市　ぽんこ
祈祷中お澄まし解る七五三　なつき
風渡るすすきの原を駆けめぐり　あられ
石蕗日和狭庭に妻とティータイム　三刀
冬ざるる牛舎に錆びし農具置き　たかを

二〇二〇年一〇月三一日

肉厚のゲノムの鯛やうそ寒し　うつぎ
中座して名残の月を惜しみけり　せいじ
ひろびろと蝶の遊べるそば畑　あられ
球磨川の水禍の空を鳥渡る　凡士
椎茸の榾木が目玉植木市　たか子
足湯して秋満喫の山の駅　凡士
大いなる算盤の如柿吊るす　こすもす

毎日句会みのる選・二〇二〇年一一月八日